移民第二世代青年期のエスニシティ間比較（２）

－中国帰国者三世の文化変容パターン－

職業能力開発総合大学校　坪田光平

１．本報告の目的

本報告の目的は、日本社会の中国系ニューカマー第二世代に焦点を当て、第一世代の人的資本と家族構造、そして編入様式のあり方が、第二世代の文化変容パターンにどのような違いをもたらすかを考察することである。本研究では、Portes&Rumbaut（2001=2004）の分節的同化理論を援用し、日本の義務教育経験を有する中国帰国者三世の文化変容パターンを考察する。本報告で設定した研究課題は以下の通りである。

1)　中国帰国者三世には、どのような文化変容パターンがみられるか。

2)　親の人的資本と家族の構造、編入様式は、第二世代の文化変容の分岐にどう影響しているか。

２．研究の対象と方法

本報告では、義務教育を日本社会で過ごした中国帰国者三世（11 名）を取り上げる。対象者にはスノーボール形式でアクセスし、渡日経緯、親子関係、義務教育経験や就労状況にわたって半構造化インタビューを行った。学歴別には、大学進学が 9 名、高卒が 2 名である。

３．分析結果

国内における中国帰国者三世の間からは、文化変容に関して以下三つのパターンが析出された。

まず、全ての対象者に共通しているのは、華僑・華人が「教育を重んじる伝統」（陳 2016）をもつとされる様に、親は大学進学という高い教育期待を子どもたちにかけていたことである。この文脈から示される第一のパターンは、「協和型」である。ここでは、親の適応努力によって家庭内で日本語が使われ良好な親子関係のもと大学進学が達成される。第二は「不協和型」パターンである。ここでは、親からの高い教育期待を内面化して大学進学を達成する上昇移動で共通しつつも、主流社会に対する親の適応努力が相対的に不足し、親子関係に葛藤を伴いながら日本人化する様相が見られる。そして第三は、「協和的抵抗型」パターンである。ここでは、親族が密集する生活世界に身を置くことで中国人としてのアイデンティティや言語獲得が達成される一方、主流社会との接点が希薄となる。ここで分岐があるのは、学業達成を促す教育資源へのアクセス可能性と安定した家族構造の両者が備わっているかどうかである。ルーツを支える資源をはじめ両者が満たされる場合には高等教育への進学を中国人として果たす「上昇移動型」となり、十分な資源が得られず主流文化への適応が抑制される場合には、中国人としての上昇移動が困難になる「下降移動型」となる。

以上の文化変容の分岐には、親の人的資本と安定した家族の構造、そして編入様式――本研究においては親族の集住傾向が影響を与えていると分析できる。親が主流社会に適応している場合には、エスニック・コミュニティの助力なく子どもの学業達成は促進されるが、親の人的資本が少なくとも、親族が集住するエスニック・コミュニティに埋め込まれる場合、子どもは親たちの監視のもとで学業達成は促進される。そして、不安定な家族構造で学業達成を促す資源を調達できない場合、子どもの学業達成は阻害され、親やコミュニティに依存的な文化変容に分岐すると考えられる。

文献

Portes,A. & R.G.Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation,* New York: Russell Sage Foundation.（＝2014,村井忠政他訳『現代アメリカ移民第二世代の研究－移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.）

陳天璽，2016,「華僑華人――マルチ・エスニック・ジャパンへの希望の芽」『マルチ・エスニック・ジャパニーズ――○○系日本人の変革力』佐々木てる編（駒井洋監修），明石書店，130-149.

謝辞　本研究は科学研究費補助金基盤研究（B）26285193 の助成を受けたものである。